

参加者、

岡部、小海、古田、高橋、田中、中島、
古川、町田、山下、横関、山岡、安田、
お見送り一吉村、

BMW RS Club

Sep 3, 2000

暑かった東京に高原土産の
小さな秋を持ちかえった一日

かわらばん

いつも夏の後姿を見送るのは、何か寂しさを感じますが、今年の夏の暑さが異常だっただけに、九月の声を聞いて誰もがホットさせられたことでしょう。昼間はジトリと絡み付くような暑さに悩まされ、日が落ちても七月の後半から30数日もの熱帯夜が続き、まさに地獄の底の大鍋で、閻魔大王に丹念に煎(い)りつけられているかのようでした。今年は例年より一月遅れで、大川の花火大会が開かれました。夜空に打ち上った大輪の花を眺めていると、暑いと言ひながらもあちこちと遊び歩いた、去り行く今年の夏の想いがフット頭をよぎりました。私事で恐縮ですが登山中に、自分の乗っていた雪渓が突然すぐ目の前で崩れ落ち、危うく命拾いをしたこともありました。

また出羽三山の一つ「月山」に登ると、其処は未だ見ぬ「あの世」を思わずかのようにチングルマ、イワカガミ、コバイケイソウそして山肌を黄色く染めたニッコウキスゲなどの花々に包まれ、その中を雪解け水がせせらぎを造り、音を立てて流れています。雪渓と霧と花々とのコントラストが、思わず息を飲む程の見事さでした。

瀟洒な麓の宿の露天風呂につかると、岩の上には地酒の盆が用意され、自分の登ってきた山の頂が、見事な茜色(あかねいろ)に染まるのを眺めつつ、つい杯を重ねた酒の旨さはまた格別でした。そんな今年の夏が過ぎ去ろうとしています。

照りつける太陽の下で咲いていた、百日紅(サルスベリ)や夾竹桃のピンクの花が、桔梗やリンドウそしてトリカブトなどの青や紫の秋色に変わり、間もなく北の大地から秋の使者、紅葉前線の便りも届くことでしょう。

夏休みを挟み久々のツーリングを迎えると、ところが夏が居直ったかのように、前日の東京地方はナント37、8度という体温よりも暑い日となり、明日は一体どうなることかと案じていました。しかしその日の夕立と当日の朝の激しい風が大気を一変させ、まさかと思えるような爽やかな、如何にも秋といった感じの一日となりました。

集合地の関越道「高坂SA」に向かうと、澄みきった大気と見事な青空の中に、秩父連山がクッキリと姿を現しました。ノコギリの歯のような両神山の隣に、セメント採取の為に岩肌を削り取られた武甲山が、痛々しく山肌を見せています。その中で富士山が一際高く誇らしげに聳え、高速道路沿いの木槿(むげ)も彩りを添えてくれています。

体調が未だ不十分だという吉村さんのお見送りを受け、道中が長いからと八時半を少々回ったところで出発です。前方に谷川の山々を見ながら上信越道に入り、左手に妙義山の岩山を眺めつつ「臼井軽井沢IC」に終結しました。軽井沢は相変わらずの混雑で、「こんな都会の延長みたいな処に気取って来るなら、涼しい伊豆へでも行って旨い物を食べながらノンビリする方が余程気が利いているね~」という無線の会話がありました。確かにそうかも知れません。洒落た建物の中に、古びた手入れも不十分な別荘を見ると、ヤット持ちこたえているようで何か空しさを感じました。峠を上り「峰の茶屋」を右手に下り白根方面に向かいます。サルビヤやハゲイトウが燃え立つように咲き、早くも秋桜(コスモス)が咲き乱れています。青空の中にちぎれ雲が浮かび、高原はもうすっかり秋の風情です。白根山の「道の駅」で一休みして、先を急ごうと11時ジャストに出発し、度々走っている急坂を山頂目指して向かいます。硫黄の匂う山道を上っていると、木々の緑がますます濃くなり、遙かな山並みの美しさは格別でした。百根山頂を過ぎ志賀方面に道をとると急に冷え込みが強まり、半袖にメッシュのジャンパー姿では震え上がってしまいました。その上に強風が左手から激しく吹きつけ、あの立ち枯れの白い木々の続く辺りでは、気を付けないと反対車線に押し出される程で、ステアリング・ダンパーを締めて走りましたが、本当に怖い思いをしました。

すっかり奇麗になった蓮池地区から丸池を過ぎ、今日の飯処の渋温泉に着いたのは12時ジャストでした。清流が温泉街の中を流れ、周囲の山々がクッキリと緑の中に浮かび上がって、遠来の我々を出迎えてくれたかのようでした。「松屋」という古い感じの宿屋さんは、会長・田中さんの子供時代からの知り合いで、今回のツーリング通知には「ワケありの、あの人のことを思い出さずにいられない、そんな女将の居る宿~~」とあった、その女将がにこやかに出てくれました。「まずは温泉に入って浴衣にお着替え下さい」という言葉に従い、早速に小じんまりとした硫黄泉につかりました。空いていたので女湯に入りましたが、なんとなくお湯が滑らかに感じられ、その為でもないでしょうか、痛んでいた膝の具合がすっかり良くなった想いでした。

長老町田さんの音頭で巨峰ワインで乾杯しミニ宴会の始まりです。お酒が回るほどに何時もの、町田さんの大人の講義が始まり、仲居さんも腹を抱えて大笑いをしていましたが、彼一人がモテモテでした。「今度はあんたに会いに一人で来るよ」と調子の良い事を言っていました。このまま泊まってゆきたい程でしたが、再度温泉に入って(今度は男湯に)酔いを醒まし、3時半を回って女将に見送られて出発となりました。川風が湯上がりにとても爽やかでした。

当初の予定では、此処から葛飾北斎で名高い小布施に回り、菅平経由で小諸に入る筈でしたが、

信州中野で既に四時となり、ツルベ落と

しの秋の日を考え、各車が此処で給油をし上新越道に入りました。

此処まで東京から260キロの道程。

12名の半数が中央高速へ向かい、岡部、

田中、町田、安田、山岡の5氏と私が関越道へと別れました。山々に包まれるような感じで走る

気分は、心までが大らかになりました。

松代、上田など途中の地名を見ている内に、真田昌幸信之、雪村の親子が敵味方に別れ、共に戦った

関が原の話がフット頭に浮かびました。

「横川SA」で最後の休憩を取り、高

速に戻ると凄い渋滞の始まりです。

やがて「甘楽」に近い処で、バイクもから

んだ凄い事故が有り、原型を留めない程に壊

れた外車などが、何処までも道を塞いでいまし

たが、キット大変な人身事故だったろうと、思わず

背筋に寒気が走った程の大変な事故現場を見ました。

空を焦がすようにして日が沈み始めると、周囲の山々が黒いシルエットに変わり、なんとも幻想的な佇まい(たずまい)を見せ始めました。見慣れた筈の山々が何か別の顔を見せ、化粧をして化けた元ベッピンの婆さんを思わせました。一日違いで見事な秋晴れに恵まれ、素晴らしいコース選びと飛び切りの宿でくつろぎ、小さな秋を終日追っての一日でした。気の合った仲間と元気に楽しく遊び、生きている幸せを心から感謝したくなるような、そんな一日でした。

幹事役の田中さん、長い距離でしたが本当にご苦労様でした。帰宅した私のメーターは502キロを示していました。

来月は一泊旅行で蒲郡に向かいます。各自くれぐれも体調維持及びバイクの整備にお勧め下さい。